HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	［実践報告］ 多様な生徒に対応する取り組み : 通級指導教室と自立活動の実践から
Author(s)	髙橋, 江恵
Citation	北海道大学教職課程年報, 8, 9-17
Issue Date	2018-03-30
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/75230
Type	bulletin (article)
File Information	4_2185-9809_8.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

実践報告

多様な生徒に対応する取り組み

―通級指導教室と自立活動の実践から―

髙橋　江恵

上士幌高等学校より参りました髙橋と申します。私は教員21年目、上士幌高校に着任して9年目になります。担当教科は家庭科です。本校では特別支援教育コーディネーターという役割もしております。

まず始めに、本校が平成26年度から3年間取り組んでいる研究指定事業について簡単に説明させていただきます。文部科学省の「高等学校における個々の能力、才能を伸ばす特別支援教育」という研究で、現在は全国で22校の高校が取り組んでおります。本校の実践項目については、ご覧の五つの点なのですが（資料1）、特に何をしているかといいますと、高校における自立活動という特別な領域を設定して、通級による指導という形態で指導していることです。

資料1　上士幌高校での研究指定の実践事項

（1）　特別な教育課程の編成・実施

（2）　全校生徒が利用できる部屋（リソースルーム）の設置

（3）　自立活動「スキルトレーニング」実施

（4）　校内研修を通しての授業改善

（5）　校内体制の構築及び地域の専門家とのネットワーク構築

さて、地域、学校概況についてです。上士幌町の特徴ですが、基幹産業は農業です。畜産と畑作が中心です。ここ数年ふるさと納税の上位にランクインし、新たなまちづくりに取り組んでおります。上士幌高校の特徴ですが、全日制の普通科で1学年2クラス、現在185名在籍しております。管理職、事務を除いた教員数は17名です。地元の生徒は20%くらいです。そのほかは帯広市、音更町などで、バスで大体60～70分かけて通学してきます。進路学習にも力を入れており、毎年国公立の大学にも進学しています。進学講習のみならず、就職者向けの講習にも力を入れており、進路実績にもつなげております。ここ数年は進学が7割、就職が3割くらいです。先ほど遠方か

らも通学する生徒が多いと言いましたが、上士幌町から手厚い支援があり、現在は通学費全額補助、見学旅行費の半額補助などの支援があります。来年度以降は制服を改定し、入学生全員に制服代が上士幌高校振興会から補助されます。そのぶん通学費が全額ではなくなるということが決まっております。

どのような生徒が本校に入学してくるかといいますと、町内の子どもたちは、穏やかで素直な生徒が多いのですが、競い合うとか、それから挑戦することが苦手な生徒も多いです。一方、町外から来る生徒は、すべてではないですが、例えばいじめや人間関係のトラブルから、過去の関係を断ち切るためにわざわざ遠方の学校を選んでくるとか、学習面で困難さを抱えてくるとか、居住地域の高校に学力の問題で入学できないケースや、家庭環境に大きな問題を抱え、経済的な困難さから補助の手厚い本校を選んで来るなどさまざまな場合があります。本校における生徒の状況ですが、学校が把握している自閉症スペクトラム等の診断名のある生徒は数名おります。そのうち療育手帳ですとか身体障害者手帳を取得しているケースもありますが、確認できていない生徒もいるかもしれません。本校では校内支援委員会を組織していますが、より動きやすいようにサポート会議という小委員会を設置し、週一回、養護教諭、各学年にいる特別支援教育コーディネーターで打ち合わせを行います。そのときには、各クラスで支援を必要としている生徒がどれぐらいいるか、どんなことに困難を抱えているかなどの調査もしています。個別の支援が必要だと思われる生徒は、全体の2割程度在籍していて、特にここ数年では、精神的に不安定でカウンセリングなど医療機関への受診が必要な生徒も多いです。現在そういった生徒数名と知的障がいのある生徒もおり、なかなか手が回らないような状況が続いています。

次にSRについて説明します。SRとは本校でいうリソースルームです。私たちはこの研究指定事業を受けて、一部の生徒の困難さに対応する内容にはしたくないと思い、全校生徒にとって役立つ取り組みにしたいという願いから、このリソースルーム、気持ちを落ち着かせる場所を設置しました。教室名をSRと名づけ、何か困ったことがあったり、感情のコントロールがうまくいかなかったりしたときに、一息つくところという目的で使用されています。教室は会議室を借用しました。SRの利用のルールは資料のとおりですが（資料2）、ここにずっといるということは、授業を欠席するということになりますので、できる限り授業に出席できるような、例えば本校ですと50分のうちに15分未満であれば授業出席扱いとなるので、ＳＲで10分ぐらい利用して、あとは授業に行こうというふうに促しています。

続いて自立活動、スキルトレーニングの実際です。まず自立活動とは、障がいによる学習上、または生活上の困難の改善、克服を目的としています。本校では通級指導教室で学ぶ科目名を自立活動とはせず、スキルトレーニングという名称にしました。研究指定を受けている全国の高校でも、ライフスキルトレーニングですとかソーシャルスキルトレーニング、キャリアデザインなど、さまざまな科目名をつけて取り組ん

資料２　　通級指導教室『SR』利用のルール

（１）全校生徒が利用することができます。

（２）担当教員に利用目的を伝えてから利用してください。

なお、授業時間の場合は、教科担任にＳＲ利用の事情を必ず伝え、許可を得てください。

（３）クールダウンなどの利用時間は、授業出席となるよう努めてください。

（４）怪我、病気などでの利用はできません。その場合は保健室を利用してください。

（５）生徒のみでの利用はできません。必ず先生がつきます。

（６）教室内の物品の持ち出すことはできません。

でいました。本校では１学年の履修科目がすべて必修科目であったため、通常の時間割にはスキルトレーニングを組み込まず、後期の放課後に実施をしています。２年次、３年次は選択授業と並行して設定し、通常の授業時間内で週に２時間実施しています。これらはすべて８割以上の出席で単位認定し、卒業単位に含むことができています。評価は活動内容に対して文章で記述します。受講生徒決定までの流れは、最初に平成26年度はこの研究指定が正式に決定した段階で、全校集会を開いて全校生徒に研究の目的や、どういったことを計画しているかを学校長が説明し、校長名で保護者向け文書も配布しています。対象となった１年生に対して、私ともう１人コーディネーターの２人で教室に行き、プリントを配って詳しく説明をしています。その後、生徒、保護者にそれぞれ希望調査を取って、個別面談を実施し、生徒本人に期待される効果と予想される問題点を説明した上で承諾書を提出していただき、会議を経て受講生を決定しています。研究指定を受けていた全国の多くの高校が、高校側で対象生徒を絞り込んで面談をして同意書を得るという方法を取っていたように聞いていますが、本校ではそういったかたちでは行わず、最初から完全にオープンなかたちで取り組んできました。この方法にもいろいろ意見はあったのですが、現在、約３年経って、オープンにしたことによって、割と順調に進めることができたと思います。

新入生の状況を把握する方法ですが、本校では合格通知書の封筒の中に、まず、生徒の状況調査用紙を同封します。そして事前登校日に回収します。最近では、この調査用紙に保護者が、子どもの状況を詳しく記入してくれる方が多くなってきました。内容は簡単なチェックシートと自由記述欄がある様式になっています。さらに事前登校日や入学式時に個別面談を希望調査も行い、希望者と個別面談を実施しています。ここ数年は例えば、８組から10組くらいはあると思います。そのときに既にWISCな

どの診断の結果等もコピーをして提出してくださる保護者も何名かいらっしゃいます。

スキルトレーニングの指導者ですが、特別支援教育コーディネーターである私（家庭科）と、数学の教員が担当しています。二人とも特別支援の免許を持っておりません。当初研究指定の計画段階では外部の専門家がメインで担当してくださるというようなお話もあったのですが、なかなかそううまくはいかず、アドバイザーとして月に何回か町内の子ども発達支援センターの相談員の方に来ていただいて、授業の様子を見ていただいたり、アドバイスをいただきます。本校は26年度の後期から通級をスタートしました。その翌年から研究指定で多くの学校が実際に自立活動を行ったのですが、そういった学校の資料を見ますと、ほとんどの学校が特別支援学校と連携がうまくいっていたりですとか、特別支援教員の免許を持っている教員が配置されて、自立活動に取り組んでいることが多かったように思います。十勝管内では、本別高校と大樹高校、そしてうちの上士幌高校を入れて3校がこの研究指定に取り組んでいるんですが、本別高校と大樹高校では特別支援学校から教員が配置されてこの指導にあたっています。ただお話をうかがうと、高校と特別支援学校の教育では、文化といいますか、単位認定や評価といったところでは大きな違いもあるので、そこをうまく折り合いをつけながら指導にあたることに苦労されているということを伺っております。

本校の通級スタイルのメリットとデメリットは、例えば、普通高校を希望して入学してくるので、みんなと同じスタートを切れるということが大きなメリットと思います。半年間かけてアセスメントできたり、生徒や保護者と信頼関係を築くことができることも大きなメリットだと思います。ただデメリットとしては、入学当初に困難度がわかっていながらも、最初の半年は通級ができないのはデメリットの一つですし、部活動を頑張りたいという生徒にとっては、放課後に通級をやっているため、部活動を休むことになるのはデメリットです。また今年の2年生でもありましたが、選択授業に自分が興味のある授業があった場合、教員配置の関係上選択授業と並行して自立活動を設定していますので、ほかの選択授業が選択できないということがあります。今年の生徒は悩みながらも自立活動を選択し、現在取り組んでいます。

具体的な自立活動の内容ですが、例えば、もう1人担当は進路指導部長でもありますので、進路のことも考えながら卒業後にも役立つことを中心に取り組んできました。場面緘黙の生徒が多かったこともあり、コミュニケーションにかかわるトレーニングを多く設定しました。特に就労に向けた内容を組み入れました。最初は信頼関係を築くために、カードゲームなどで言葉のキャッチボールをとおして、教師との信頼関係を築きました。そのあとに、例えば2年生全体で行うインターンシップの前に、スキルトレーニング受講生徒には事前に働くということについて学習させ、本番のインターンシップの見通しを持たせ、各自何を準備しておいたほうがよいのか目標を決定し、何度もシミュレーションを重ねて自信をつけさせて、本番を迎えるというような取り組みをしました。口頭での指示によって聞き取れなかった場合はメモを取るとか、わ

からないことは質問するとか、ミスをした場合には報告に行くとか、そういったことも行っております。また、1年時の冬休みを使って献立を作成して実際にスーパーまで買い物に行き、そして今回は、ロールキャベツを作りたいということだったので、ロールキャベツを作る実習もやってみました。

この自立活動の受講した生徒の変化についてはいろいろあります。例えば場面緘黙だったAくんの場合は、1年生の段階で苦手な教科の欠席が重なってしまい、もう進級、卒業が難しいという段階まできました。ただ、SRが開設されたタイミングで、いろいろと個別に話を聞くことが増え、10分休みごとにほんの数分でもSRで落ち着かせて、そしてまた教室に戻っていくこと繰り返して、現在3年生となり、調理師専門学校の進学を希望し決定しました。自立活動においてもグループでのリーダーとしても頑張っています。しかしリーダーとして頑張ってみたい自分と現実は違って、時折気持ちが落ち込んでしまうことも繰り返しながら、自分で何とか気持ちを高める方法を探しているところです。またCくんの場合、ほとんど学校の中では誰とも話をしません。自立活動を受講している4人という環境の中では、少しずつ自分の思いも伝えられるようになってきています。そして、進路のことについても自分の中でいろいろなシミュレーションをしていて、現在は地元の短大の方に学校に来ていただいた際に面談をしました。短大には玄関まで保護者と行きましたが中には入ることができなかったため、担当者の方が来校したときに面談ができるようイメージを膨らませている段階です。本当に生徒それぞれ違うので、自立活動だけではなくて、高校においてほかの生徒同士とか、それからさまざまな活動によって成長できたといえることも多いと感じています。自閉傾向の生徒などは、生徒の特性によって個別または少人数で学べるこが取り組みやすさにつながっていて、能力の伸長につながった部分もあると感じています。これまで本校が取り組んできたことを踏まえて、高校における自立活動で取り入れたいことを考えると、生徒一人一人が小さなことでもよいので、できた、わかったという達成感を感じて、通常の学習活動でも意欲的に取り組めるきっかけを作ること、さらに生活での自立、社会での自立のプログラムをとおして実生活に必要な事柄を体験し、そしてそのスキルを身につけられることだと思います。そのためには保護者との連携、地域との連携、それが大事になってくると思います。現在上士幌町ではこども園があり、幼保、小中高が連携してさまざまな研修を行っています。まだまだスタートしたばかりなので課題は多いのですが、将来的には地域全体でインクルーシブ教育につながればと考えております。

高校での通級による指導実施に向けての課題を挙げました（資料3）。何より高校教員の意識改革だと感じています。通級による指導だけで、生徒の困難さがすべて軽減するわけではないということをまず念頭に置くことが大事だと思います。本校では発達障がいの診断のある生徒、または発達障がいの疑いのある生徒、LDの疑いのある生徒、衝動性が高く問題行動を繰り返す生徒など、困難さを抱える生徒の多くが、自

立活動を選択しておらず、通級による指導を受けていません。通級だけでは、そういった生徒のサポート、カバーはできないので、その他いろいろな方法で高校生活を送れるようにサポートしているのが実態です。

資料３　高校での「通級による指導」実施に向けての課題

（１）　高校の意識改革

授業改善、観点別学習状況の評価

通級による指導は一手段であるという認識が必要

（２）　教員の配置、教室の設置、教材教具の整備、研修機会の確保、支援員の確保

（３）　地域のネットワーク構築・就労開拓

核となるコーディネーターが必要

（４）　入試前の説明で具体的にどう説明できるか

→生徒・保護者の要望をどこまで受け入れられるか

（５）　中学校からの個別の指導計画の適切な引継ぎ

（６）　進路先への引継ぎ方の工夫や社会全体の理解が必要

今年度、自立活動受講生徒の保護者と面談したときの反応です。自立活動を受講することで、進路先がどう受け止めるか不安であるので、受講はしたいが調査書には記載しないでほしいと要望されたケース。逆に自立活動受講をきっかけに、進路先に子どもの特性を伝えるよいきっかけになるのではと好意的に受け止めてくださっているケース。高校で毎年教育ジャーナリストの品川裕香先生を招いて生徒たちに認知特性の講演を行っているのですが、そういった講演を全校生徒が受け、それで多様な人がいて、ともに学び、ともに生きていくことを学べる環境があることがすばらしいと評価してくださる保護者もいました。自分の息子さんは自立活動を受講していないのですが、何かお手伝いができることがあったらうちの息子を使ってくださいというような申し出もありました。

今後高校では、より一層多様な学びのスタイルを構築していく必要があると感じています。多様な教育的ニーズのある子どもが自立し、社会参加するためには、家庭、学校、地域が連携し、子どもたちの育ちに合わせて遊びや学びを体験し、活動できることが理想だと考えます。今考えているのは、地域にある幼保、小中高が利用できる遊び、学びの場の創設。こういったことができないだろうかということを担当者同士で考えています。北海道は本当に広すぎるので、他校通級という仕組みは本当に難しいです。例えば専門の先生がいる大樹高校に私も先日授業を見せてもらいに行ったの

ですが、高速を使って2時間ちょっとかかりました。とてもじゃないですが、地域に一人専門家がいて、その先生が巡回指導するとか、保護者が生徒を車で乗せて他校に行くというのは到底難しいことです。上士幌町教育委員会では、上士幌の高校に通う町外生も上士幌の子どもとして広く支援してくれています。

続いて校内研修についてです。本校ではさまざまな校内研修を行っています。いろいろあるのですが、特にこの3年間は、特別支援教育を中心に取り組むことができました。

私たちコーディネーターだけがいろいろ取り組むのではなく、全体を巻き込んで、教務部、生徒指導部、進路指導部など、学校全体でもいろいろ意見を出してもらって取り組んできました（資料4）。その一例としては、観点別学習評価について取り組みました。そのほか、授業のルールを文章で明確に示したりですとか、生徒の授業の状況について情報共有できるように連絡メモ、支援メモというチェック用紙を作り担任にすぐ伝達する仕組みを作りました。さらに自己管理ノートを全校生徒に持たせてスケジュール管理や振り返りができる力を身につけさせる取り組みも行いましたうまくいったものもあれば、うまくいかなかったものもあります。いろいろ検証した上で、あまり型にはめ過ぎずに「できればこうしてください」と教科担任へ協力を要請しています。

資料4　　上士幌高校での取り組みの一例

多様な生徒が在籍する中、授業に関する共通ルールを確認、
生徒にわかりやすく視覚的にも提示、学習環境の整備

（1）　年間指導計画の見直し
（単元ごとの目標を明確化、観点別学習状況の評価の研究）

（2）　教務部より「授業に関するルール」を文書で明確にし、生徒へ配布＆説明

（3）　学習環境の整備の呼びかけ（黒板周辺の掲示物の整理）

（4）　『連絡メモ』『支援メモ』の活用（生徒の情報を担任へ伝達）

（5）　自己管理ノートの導入（自分の記録をつけ、振り返りと計画を実施）

それによって学校の変化も見えてきました（資料5）。教員の意識が変わると、それを見ている生徒も変わってくるというところで、生徒同士の助け合い、他者尊重の心も育まれてきた部分もあります。

資料5　学校の変化

・生徒のちょっとした変化に気付き、教師が声をかける。

教師と生徒の関係づくり ＝ 大人を信じてみようと思うきっかけ

「話を聞いてくれる先生が学校にいる」

先生が話を聞いてくれる（尊重される）

→繋がりができる

→アドバイスを受け止める気持ちが芽生える

→やってみる

→うまくいった

→信頼関係構築のスタート

・人それぞれの違い（性格、感覚、考え方、得意・不得意など）を教師自身が理解し、教師一人一人がそれぞれの方法で日常的に生徒に語りかける場面が増えた。

例：授業、ＬＨＲ（学級通信）、学年集会、部活動、個別面談、外部講師による講話など

・教員が生徒に寄り添い、サポートしている姿を見て、周囲の生徒に他者尊重の心が育まれてきた。（ナチュラルサポート）

→インクルーシブ教育

校内支援体制の構築及び地域の専門家とのネットワークは、このスライドのとおりです（資料6）。特に学年コーディネーター3名つけていることが、ほかの学校と比べて大きく違うところです。地域との連携については、6月ぐらいに私ともう1人のコーディネーターで、地域を回って、連携強化をします。何かあったときのために顔をつないでおく、挨拶に行っておく。それで、もし何かあったときには、電話ですぐに連携が取れるような体制をとっています。

以上で発表を終わります。ありがとうございました。

資料６　　校内支援体制の構築・地域の専門家とのネットワーク構築

【校内支援体制の構築】

・３名の特別支援教育コーディネーター（CO）を各学年、各分掌に配置

・通級指導教室にサポートティーチャー（ST）を配置

・支援員（1名）の配置

・週１回サポート会議（CO・養護教諭・ST・支援員）

・校内支援員会（教頭、教務部長、学年主任、 CO・養護教諭）

・支援計画と指導計画の作成

【地域の専門家とのネットワーク構築】

・上士幌町教育委員会　子ども課

・北海道立緑ヶ丘病院（精神科、児童精神）

・帯広市保健所

・帯広警察署

・十勝障害者就業・生活支援センター　だいち

・発達障害者支援道東地域センター　きら星

・スクールカウンセラー（毎月１回来校）